

長年における「CSデザイン賞の公募活動」に対して

株式会社中川ケミカル

中川ケミカルといえばカッティングシートを開発し、現在も多彩なサイン素材を開発・提供しているが、同社が業界のリーディングカンパニーである所以は、先駆者という歴史だけによるものではない。昭和57年(1982)から開催しているカッティングシートによる公共物デザインのコンペティション「CSデザイン賞」は、カッティングシートの可能性だけでなく公共物としてのデザイン=サインという存在理由をいつも我々に問い掛け続けている。今回特別賞の選定にあたり、CSデザイン賞は装飾部門、サイン部門、輸送機器部門、実験部門とし、すでに20年にわたる公募活動であること。近年は優れた作品が多く、建築・環境・空間・グラフィック等に携わるデザイナーにとって魅力ある公募で社会的貢献度が高いことが

評価された。

「CSデザイン賞は昭和57年(1982)からスタートし、現在はビエンナーレ(2年毎の開催)として次回で14回を数えます。第一回は故・勝見勝先生を審査委員長に迎え、現在の審査委員長は永井一正先生。これほどの方々に支えられながら続けてこれるのも、単なるカッティングシートの普及を目的としたものではなく、公共デザインの未来を考えるうえで意義深いものとして皆様にご理解いただけているからだと思います。」

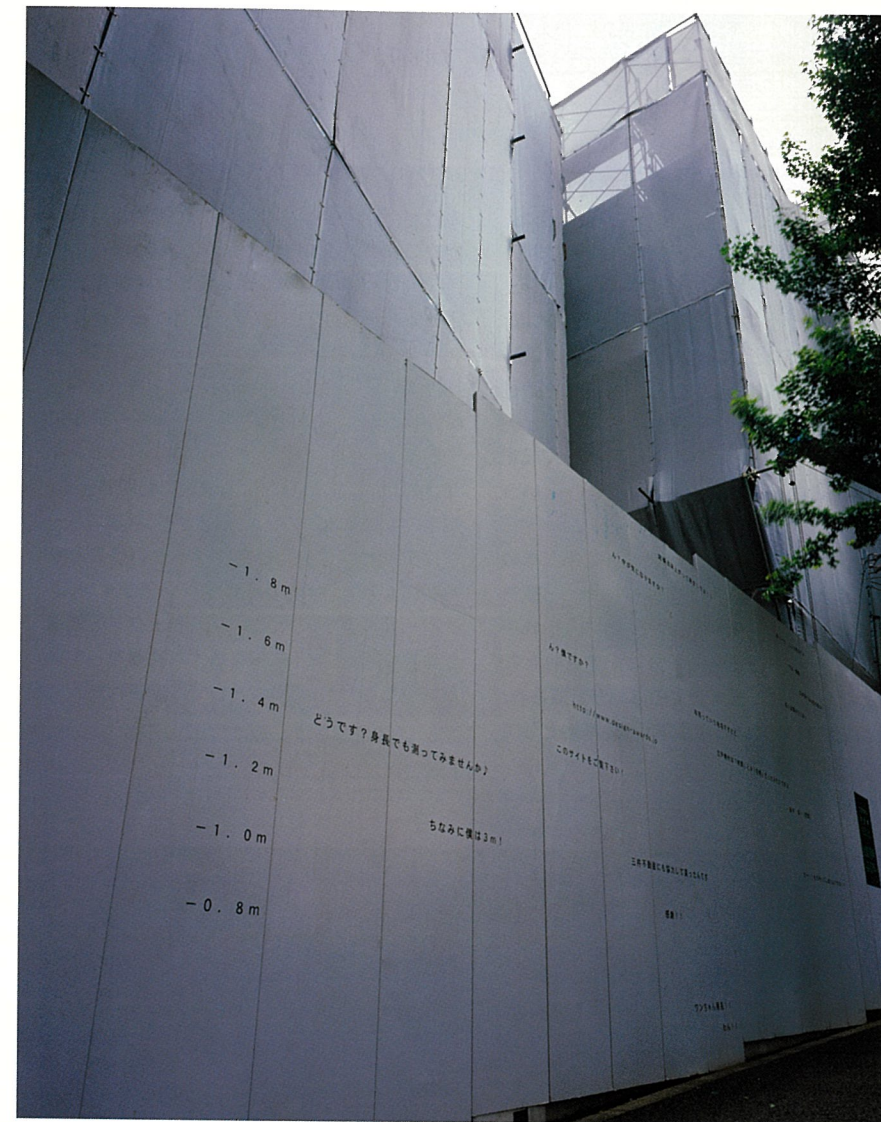
同社にとって1980年代のC.I.ブームはカッティングシートが広まるきっかけであった。しかし同時にC.I.ブームは、景観・環境との調和を無視したエゴイスティックな軽挙を促してしまった。

「例えば、パチンコ店などはケバケバしい蛍光色を多用していたりしますよね。それはいわば色の公害>と言ってもよいと思います。CSデザイン賞は、C.I.ブーム以降顕著になった色の公害>に対して模範となる事例を示す役割も担っています。ちゃんとした(色の)使い方をすれば、派手でなくてもちゃんとお客様に訴求できるということを示していかなければいけません。」

色を的確に選びやすいと好評のNOCSや、金箔から緑青といった扱いの難しかった素材を、その質感をそのままにカッティングシートとして開発したスーパーマテリアといった、付加価値の高い商品を開発し続ける同社の、公共デザインを支える社会的使命感の高さが、このCSデザイン賞の背景にあるのだ。



第13回CSデザイン賞 大賞 <デザイン・デパート>会場デザイン

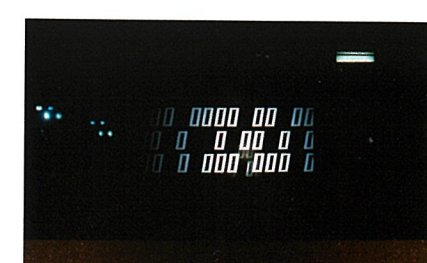
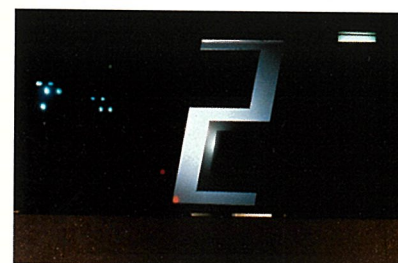


CSデザイン賞は、第10回目より<学生賞>を新設。工場の仮囲い、路面電車のビジュアルデザインそして自由課題の三部門で構成されている。「工場の仮囲いも路面電車も公共物というか、ある意味では社会や環境との調和が求められるものです。自由で社会とのしがらみのなかった学生という立場からデザインを考えてきた人たちが、斬新な発想で環境への提言をしてもらいたいという気持ちがあります。毎回、突拍子もないものや予想できないものが提出されていて、ここから何か新しいものが出てくるのではないかと期待に胸を膨らませています。」

左の写真は2004年度CSデザイン学生賞で金賞を受賞した宮川清志さんの作品(当時、桑沢デザイン研究所 デザイン専攻科専攻)力強く訴えかけるのではなく、それでいて見る人を引き寄せるというアプローチが評価された。今後も、新しい才能の芽が、このCSデザイン賞学生賞をきっかけに育まれていくことだろう。



第12回CSデザイン賞 大賞 原宿Yビル工事現場仮囲い



第11回CSデザイン賞 大賞 資生堂<ウィンドーディスプレイ2000年 New Year>